
パーフェクト・メモリーズ・コーポレーション

中津遙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パーフェクト・メモリーズ・コーポレーション

【Zコード】

Z98120

【作者名】

中津遙

【あらすじ】

ドラマみたいな恋愛がしたい？

感動の家族を演出したい？

それとも億万長者になって世界を巡りたい？

奇跡だつておてのもの！

当社パーフェクト・メモリーズ・コーポレーションにお任せあれ！

何でもお望みの思い出をおつくりします！

さあ、あなたも最高の思い出、作りませんか？

お題はお話し下さいです。

駅の改札を降りると、ロータリーには何にもなかった。寒々しいほど人気もなく、そこら中に銀杏の葉が山になつて溜まつている。もう秋もずいぶんすぎてしまつた。

足元に絡まる黄色の葉をガサガサと無意識に山を蹴散らし、薄汚れた自分のスニーカーを見つと固まり、ちょっと恥ずかしくなつて慌てて山から離れた。マフラーに半分顔をうずめながら、ちつと舌打ちをする。

小学生か、俺は。

学ランのポケットに手を突つ込み、黙々と歩きはじめた。

空は暗雲に包まれ、今にも泣き出しそうだった。

駅からうねうねと続く住宅街と道路を十五分ほど歩いたところに、公園がある。

4丁目公園、とさび付いた看板が見えてきて、それを通り越して公園を突つ切つた反対側に、クリスマス一色です、と言わんばかりのライトで飾り立てた家がある。どこから買つてきたのか、2階からでかいライトのツリーが光り、味氣ない門前には笑えるほどサンタクロースが並べてある。表札は木製で、佐々木と書いてある。ポストには何も入つていなかつた。

ひらひらとなびくモールで飾られた門を開け、猫の額ほどの庭と駐車場を数歩歩いて、玄関に辿り着いた。鍵は開いている。

「ただいま！」

開け放つたドアの向こうへ、叫ぶ。

一瞬、ざわつと空気の振動を感じたように思つたけど、すぐにかき消されてしまった。

廊下の奥から小走りに出てきた中年の女性と男性、背の高い少年によつて。

「おかえり。」

「おかえりなさい。」

「…おかえり。」

3人の顔にそれどれ一瞬戸惑いや驚きがよぎつたが、すぐにほつとしたように笑つた。

「ただいま、母さん、父さん。アニキ、大学は？またサボりかよ。」
「ばか、お前と一緒にすんな。今日は…半ドンだ。」

「はあ～？マジかよーずりーなー。」

苦笑交じりに兄さんは笑つた。マジだよ、ばーかと言われ、早く上がりなさい、と母さんが笑つた。

父さんの顔も二口二口としている。最も、父さんは顔の造りが「二口二口」だから変化がないといつてもいい。

台所には、何故か切りかけのキャベツの千切りが山になつて残されていた。隣には手をつけてやめてしまつたかのように、半分だけつぶされたジャガイモがやはりボウルの中で山になつてゐる。

今日はコロッケなのか？

鞄を肩から下ろしながら、何か菓子みたいなもんはないかな、と思わずきょろきょろとした。実はとんでもなく腹がすいている。

「お菓子なら居間にあるわよ。でもすぐにご飯作るわね。勇太、何か食べたいものある？」

「えー？別になんでもいいよ。でもチョーハラへつたから、超特急で！」

「はいはい。…今日は剣道、良太君に勝てたの？」

「…また負けたよ。」

唇を尖らせ、そっぽを向く。思わず父さんが声を出して笑った。

「あらあい。」

「良太君は背が高いからなあ。」

「俺だつてすぐ伸びるよーもう一ヶ月だし、成長期だし、アニメだつて160あるし。だろ！？」

居間に座り、テレビを見始めたアニメに向かつて声をかけると、フン、と鼻息が聞こえた。

「お前、牛乳嫌いだからもー伸びねーよ。」

「飲んでるよ！…学校で。」

「学校だけだる。家でも飲めよ。いっぱい買ってあんだから。」

「だつてさーまつずいじやん。牛の乳だぜ？牛！」

うえつと舌を出す。また、フンと鼻で笑われた。

ちえーいいや、今にアニメを越して見下ろしてやる。そんでもまいりましたつて言わせてやる。

暖かい部屋に入ったせいか、無意識に学ランを脱げりとじて、結局思い直してかばんをとった。

「俺、着替えてくる。」

ソファーを立つと、また空気が揺れたように感じた。父さんの二口二口がちよつとだけ固まり、母さんが怒つたようにさつとふり向いて俺の腕を掴んだ。

「わつ…！」

「あ…。」

「な、なんだよ。びっくりしたなーもー。何？」

「え？ええ、いいえ、何でもないわごめんなさい。何だか、勇太が急に…背が伸びた感じがして。」

「えつーマジ！？わつやべ、ちょっと、測つてこないとーアニメ、メジャーどこだつけ！？」

大急ぎで居間に駆け込み、引き出しをひっくり返した。何故か大量の爪切りを見つけて、次の引き出しを開けた。兄貴がめんどくさそうにソファーから立ち上がり、引き出しをあちこちあけて回る俺を

見下ろした。

「知るかよ。1mmだらびーせ。1mm。」

「なんことないつて2cmくらい伸びてるつてきつとーいからメジャー探すの手伝えつて！確かにないだ測つた時どつかの引き出しがしまつたんだよなー。」

「そつちの引き出しじやなかつたか？つか伸びてねえつて絶対。つい先週測つただろーが。」

「いーや、きつと伸びてる！」

ガツツポーズと共に、俺はアニキの方を向いた。それを見て、ダメだこいつ、という風にアニキが首を振る。

「はーー…とりあえずお前、着替えてこいつて。制服でうひうひすんなよ、ジャマくせー。」

「うつせー。まー、そだな、メジャーヨロシクー。」「誰が探すかばかやろーが。」

再びソファーに座つてしまつた兄貴にかばんを振りかざすまねをして居間を出た。階段を上ると、部屋が階段を中心にして右に一部屋、左に一部屋ある。

左方の奥が俺の部屋だ。

扉には鍵が掛けられるようになつていて、鞄のポケットから鍵を取り出して開けた。開けると同時に鞄をベッドの方へ放り投げる。

鞄にはいろいろ入つてるので、いつも重たすぎる。

部屋にはじちやじちやと雑誌やら服やら、CDやらが並んでる。片付けないといけないが、微塵もやる気はしない。

MDコンポのスイッチを入れると、ラジオから軽快なロックが流れてきた。知らない曲だけど、いい感じだ。

学ランをベッドに放つて、筆筒を引いた。中身ももちろんぐちゃぐちゃだ。大体は母さんがしまうけれど、出かけるたびに出したり入れたりするのですぐにぐちゃぐちゃになる。適当な服を引っ張り出して、適当に着込んだ。突然クシャミが出た。なんだか部屋も服もほこりっぽい。

空気を入れ替えようとして窓を開けると、先ほど突っ切った公園が見えた。公園も銀杏だらけで、まつ黄色だ。もみじだつたらまだ良いのにと思いつ。

銀杏の黄色は明るいくせにどこか寂しげで暗いから、嫌いだ。空は先刻よりも晴れて、雲が千切れていった。星が一つだけ見える。星座には詳しくないから、よく判らない。

ああ、雨は降らないのか、降れば良かつたのになと思つた。

「おーい、メシ、できたぞお。」

間延びした父さんの声で、我に返つた。随分長い間ぼんやりしてたらしい。

「今行くー！」

慌ててコンポのスライドを切り、駆け下りる。良い匂いが漂ってきた。

おお、旨そうな匂いだ！

たまらず腹が音を立てる。

「わーすっげーごちそうじやんー！」

「さあ、並べて頂戴。今日は頑張ったのよ、母さん。」

「啓太、テレビなんか消して、いっしだき手伝ってくれ。」

「はいはい、今行くつて。」

かつたるそつにアーチキが立ち上がり、父さんからサラダを受け取つた。

テーブルには和洋折衷の「馳走が並ぶ。炊き込みご飯に味噌汁、ポテトサラダ、鶏肉の香草焼き、山盛りのエビフライとコロッケ、野菜たっぷりのコンソメスープ、キュウリとナスの漬物にてんこ盛りのショウマイ、サイコロステーキ、マグロとサーモンの刺身、などなど。

「こんなに食えないよ、母さん。」

「食える食える、いただきまーす！」

アーチキが眉を寄せていった。母さんは笑いながら、そうねえ、と曖昧に誤魔化した。父さんはまあいいじゃないか、と一口一口を広げた。食事は楽しい。どれもこれも、とても美味しかつた。流石に全部食べ切れなかつたが、最後のエビフライはアーチキから奪つて食べれた。コロッケは逃した。シユウマイは残つてしまひ、父さんは明日の弁当に入れてくれ、と母さんに言つて二口一口した。

風呂から上がり、髪の毛からパタパタと水を飛び散らしながら階段を上ろうとしたら、上からじつとアーチキがこっちを見ていた。廊下の電気をつけていないせいで、ひどく怒つているように見える。

「な、なんだよ。髪ならこれからちゃんと拭くつて。」

無言だ。

ただ、じつと見ている。

「なんだよ！俺が先に風呂はいつてもイイつて言つたじやんか、いーだろ別に。」

神経質そうな目が、無言で何か別のものを見ている。流石に気分が悪くなつて、わざとシカトして通り過ぎ、部屋に戻ろうとした。

「…………なのか？」

「え？」

扉を手を触れたまま、振り向く。今度は、今にも泣きそうな顔をしたアーチキを見つけた。

「は、え、なに…？聞こえなかつた。」

「いや……いや、何でもない。水、後で拭けよ。」

「そんなん、その内乾くだろ。なんだよ、もつ。」

また何かを言おうとしたアーチキをよそに、部屋に入った。

それこそ、「知るかよ」だ。

ラジオは流行りのポップミュージックに変わつてしまつていた。

耳元でピーピーと機械音がしている。

目覚まし時計だと気がつくまで、かなり時間が掛かった。まだ全然眠い。かといって寝こけている場合でもないので、仕方なく布団からずるずると這い出した。

「おはよー。」

パジャマのまま下に降りると、既に朝飯を終えた父さんと母さんが居た。一人ともギクッとしたように離れ、ぎこちない笑顔を見せた。

「おはよう。」

「おはよー、勇太。ほら、顔洗つてきなさい、頭、酷いわよ。」

「んー。」

鏡の中で、黒いライオンが眉を寄せた。鼻が一つ、目が一つ、眉も二つで、口は一つ。あまりパツとしない顔で、染めたこともない黒髪がこれでもかと跳ね返っている。

ドライヤーで昨日、乾かせばよかつた。密かに後悔したが、どうせ今日は学校は休みだ。

居間に戻ると、既に朝飯が用意されつつあった。

「アニキは?」

「まだ寝てるんじゃないかしら? 最近お寝坊なのよね、おにいちゃん。」

「ふーん。あ、目玉焼き俺、固焼きね。」

「はいはい、わかってますよ。」

テレビのニュースはいつも通り不幸を叫んでいる。今一番のニュースは、俳優が覚せい剤を使用し交通事故を起こしてしまった事件だ。俳優の家の周りに、蟻が沢山群がつていて映像が流れていた。ニュースがそれを報道してすぐ、父さんにチャンネルを変えられてしまい、お天気お姉さんが寒い中外でクリスマス特集を始めてしまった。九時を漸くすぎたころ、アニキが起きてきた。徹夜でもしたのか、

田が酷くしょぼついている。いい気味だ。

寝ぼけた兄貴はそのままバスルームへと消えていった。ニゴースをぽんやり見ていた俺に、雑誌をめくっていた父さんが唐突に話しかけた。

「なあ、勇太、どこか遊びに行きたいところとかないか？久々に皆でどこか行こうかと父さん考えてたんだが、いいところが思いつかなくてなあ。」

「階つて、家族で？俺もアーチキももうそんな年じゃないっしょ。行きたいところなんてないよー、別に。」

「そういわざに、な？というか、父さん最近運動不足でなあ、この間の健康診断のとき、運動しなさいって先生に言われちゃったんだよ。父さんに付き合うと思つて、な？」

「えーー…じゃーアーチキの行きたいところでいいかなー。」

「え？」

突然話題を振られたアーチキは、目玉焼きをご飯に載せたまま振り向いた。そのまましょゆをぶっかけ、食べ始める。アーチキの目玉焼きの食べ方に關しては、絶対俺はナンセンスだと思つ。熟々卵だし。あれじや、黄身が流れて勿体無いじゃないか！

そもそも、卵かけご飯なのか目玉焼きなのか、全く分からぬ。どつちかにすればいいのに。

結局、その日は散々父さんにほだされ、母さんに頼まれ、遊園地なんぞに来てしまった。

それもこれも、アーチキの所為である。アーチキがあの後、新しいテーマパークがどうのこうの、と言い出したのがいけない。

まあ、いいけど。嫌いじゃないし。

問題は、えらくはしゃいでしまった父さんだ。

「お、ジェットコースターだぞ、勇太！父さんと乗るか？」

「え、いやだよ、父さん一人で乗れよ」

「おーおー、怖いのか？あんなのすぐだぞ、すぐ。あ、そりだ啓太も乗るか？」

「え？…お、俺はいいよ…」

ぎょっとしてアニキは後ずさつた。既に笑顔が引き攣つている。俺はこゝとばかりにアニキに食いついた。

「はつはーん、アニキは嫌いだもんなージェットコースター…ほら、小学生のとき父さんと乗って、大泣きしたじゃん？おかあさああん…」わいよおお…！」

「うるさいーあ、あんなもん、怖いわけないだろ…」

「へーー、ほーー、んじや、乗ろりぜ」

「い、いや勇太。父さんと乗れよ。俺は母さんと…。」

有無を言わさず、兄貴の腕を取つて券売機に並ぶ父さんの背中を追う。

「おーとーせーん！アニキも乗るつてーー…三人分買つてーー…」

「おお、そうか！啓太も乗るか！よーっしー！」

父さんは無類のジェットコースター好きだ。遊園地に行けば、とりあえずはジェットコースター類を網羅する。

よつて、俺とアニキは最終的に4回連續でジェットコースターに乗らされた。たすがの俺もこれはきつい。まだジェットコースターしか乗つてないのに、ぐつたりしてしまった。同じくぐつたりしたアニキの魂はベンチの肉体からどこかへ飛んでしまった。

うーん、南無阿弥陀仏。

上機嫌な母さんは、早速弁当を広げている。父さんが一番上機嫌かもしれないけど。

「ほり、おにじちゃん。お茶よ。しつかりなさいな。」

「う……。」

「啓太は情けないなあーあれぐらい、男の子だつたら慣れないと彼女が出来ないぞ？」

「いや…父さん、流石に4回連續で乗るのは…。」

「勇太もか！ダメだなあ、一人とも。勇太も剣道をやるんだつたら、もつと鍛えなきゃいかん、鍛えなきゃ。」

「お父さんつたら、ジェットコースターと剣道はあんまり関係ないでしょ。」

「ん？いやいや、精神の問題だよ、お母さん。」

いやいや、精神の問題でもないし。

その前に俺は十分すぎるほど鍛え上げてる。

弁当の中身も、昨夜に負けず豪華だった。サンドウィッチは卵とハム、シークキン、ジャムとあり、おかずにはから揚げに、昨日のポテトサラダ、プチトマト、煮物など、詰めるだけ詰めたよつだ。まったく料理好きにもほどがある。

といつても、腹に入るだけ食べたことに変わりはないが。

昼をすぎて、再び元気を取り戻した俺たちは子供のようにはしゃぎまわって遊んだ。

いい年して、母さんはメリーゴーランドに乗り、アニキはゴーカートで俺を負かして得意げに笑った。父さんはコーヒーカップで酔つて、ぐつたりしていた。ジェットコースターは大丈夫なのに、と俺が茶化すと、遠心力がどうのこうの、と苦しい言い訳をしていた。俺は上下に揺れて廻り続ける飛行機のようなものに乗り、アニキと一緒に遊覧船に乗った。鏡の館に入り、母さんだけ出てこれずに大慌てした。のんびりしている母さんだけ置き去りになつたのだ。恐怖の館ではアニキが半泣きになつて走つて逃げた。怖いものにとことん弱いのは実にアニキらしい。

家族全員で乗つた観覧車は狭く、それ故に寒さが紛らわせた。俺が面白がつて揺らすと、父さんとアニキが青い顔をして叫んだので、

母さんと一緒に笑つた。

空は一面晴れ渡り、俺たちを祝福しているように輝いている。

やがて夕焼けが空を染め上げ、閉館のチャイムが静かなメロディーとともに響いた。

遊園地のゲートを抜けると、途端に皆無口になつた。
寒い北風が勢い良く俺たちの間をかけていく。母さんは俺の手をぎゅっと握り締め、父さんとアニキはそんな俺たちを間に挟んでいる。まるで、決して逃がさないとでもいうかのように。

ゲートの前には、大きな真っ黒いバンが一台止まっていた。駐車違反だろ？と思つたが、誰も咎める様子はない。すらりとした黒スリーツに黒コートの青年が一人、ぽつんと車に寄りかかっている。なびくタバコの煙がまるで亡靈のように青年を包んでいた。

それを見て、母さんが取り乱した。握られた手が痛い。

「勇太！ 行っちゃダメ、勇太！」

「母さん、落ち着くんだ。母さん、母さん。」

父さんは母さんの肩を抱いて、背中を擦つた。嗚咽をこぼし、泣き始めた母さんを見ながら、俺はするりと母さんの手を離し、一人足を進めた。ゆっくり前を歩いていたアニキが、突然背を返して俺の肩を掴んだ。

何かを言いかけ、苦しそうに睨みつけるアニキの顔を、俺は無表情で見つめ返した。

「…どうして！ 何でなんだ！ なんでお前が…つ…」

「痛いよ、アニキ」

「…」

アニキはまた泣きそうな顔をしていた。今にも崩れて大声で泣きそうな顔をして、俺を見つめた。

俺はそつとその手を自分の肩から下ろし、横をすり抜けた。後ろでがくっと膝をつく音と気配を感じたけれど、俺は立ち止まらなかつた。

スーツの青年は俺が近くに来ると、煙草をもみ消してそのまま俺の代わりに家族の方へ歩いていった。

俺はとまらないで、そのまま車の助手席に乗り込んだ。閉じた窓に向こうでは、母さんの泣きわめく高い声と父さんの怒った顔が何かを叫んでいた。少し離れた所で、地面に崩れたアニキが震えていた。ちゃんと怒った顔もできるんだ、と思つた。

しばらくすると家族は全員黙り込み、スーツの青年が差し出した紙に父さんがサインをした。

満足げに青年は頷き、父さんの肩を叩いて何かを言い、こちらへ歩いてきて、運転席に乗り込んだ。

青年とともに黒いバンに乗りながら、高速道路をかつとばす。

青年はまたタバコを吸っている。俺は頭に張り付いたゴムをべりべりと剥がしながら、「アニキ」は遊園地にまた行けるのだろうか、と考えていた。

「今日は随分スマーズだったなー。えーと勇太君?」

「ちやかすなよ、トイズ。それより収穫は?」

「セッティング通りだ。まああじやないか？一日ぼっきりなら、うまい方だつた。値切られもせず、突っ込まれもせず、ちつと怒鳴られただけで」

「ふん、一千万じゃすぐに消えちまうよ。」

トイズから一本タバコをくすねると、やつと息をついた。

「でも今回の仕事はちょっとかつただろ。フィットとそう人相も体格も変わらずで。あの家族もかわいそつたよな、まさかヤク中の芸能人にならまるとはさ。まあ、これでふんぎりもついたら。あんな不幸な事故なんか忘れてよ、奥さんずいぶん若かつたし、もう一人くらいがんばれるだろ？」

「また下ネタかよ。んで、次は」

「下ネタってなー、僕は今すごく良い事を…まあ、いい。次はー、えー、一週間で百六十億、場所は東京光ヶ丘、年は17で高校生、しかも豪邸だぞ！使用者が20人で、家族構成が…おい、フィット、ちゃんとマスクを脱げよ、気持ち悪い。開始時刻は明日16時だ」

「うわつ休憩なしかよ！あーもー信じらんねえ！！俺には休息も与えられないってか！」

「それが終わつたらバカンスに連れて行つてあげるよ。あつたかいところがいいだろ。東北は寒かつたなー」

「冬なんてこんなもんだ。はーーあ！早くバカンスに行きたいぜ」

年が明けたらバカンスにいける。

俺は早くも暑い太陽の砂浜へと思いをはせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9812o/>

パーフェクト・メモリーズ・コーポレーション

2010年11月18日03時31分発行